

中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

no.
2

TEL 0551-23-3046

FAX 0551-23-3013

チュウホクドットコム

中北の地域社会 (COMmunity) の心の交流 (COMmunication) をめざします

峡中地区・峡北地区 地域教育推進連絡協議会

第1回峡中・峡北地区地域教育推進連絡協議会が、6月21日(木)に北巨摩合同庁舎で開催されました。100名近くの方が集まり、協議会、研修会(講演会)、地区全体会及び情報交換会が行われました。協議会において決定した各地区の本年度役員は、次のとおりです。

【峡中地区】

- 会長 田中 正清 氏 (中央市教育委員会教育長)
- 副会長 牛奥 久代 氏 (甲府市女性団体連絡協議会会長)
- // 佐野 誠 氏 (甲府市小中学校PTA連合会会長)

【峡北地区】

- 会長 矢巻 令一 氏 (韮崎市教育委員会教育長)
- 副会長 堀内 正基 氏 (北杜市教育委員会教育長)
- // 千野 友香 氏 (韮崎市保育所連合会会長)



研修会：30年後の社会をつくる子どもたちのために ～ 求められる学力と地域学校協働活動 ～

東京大学大学院 教育学研究科 / 高齢社会総合研究機構 教授 牧野 篤 氏

1 「社会に開かれた教育課程」



新しい学習指導要領の学力観とは一体どのようなものか。「教育課程は学校の中だけでは完結しない」と、中教審(文部科学大臣の最高諮問機関)が宣言した。それを受けて、「社会に開かれた教育課程」をつくるべきだということになった。例えば、2007年生まれの子どもの平均寿命は107歳と言われている。したがって、学校の中だけの知識で一生を過ごすことは無理だということになり、これからどうやって社会と関わっていくのか、自分たちでどう人生を創っていくかが問われてくる。「確かな学力」・「健やかな体」・「豊かな心」と合わせて、「共に生きる力」を身につけていく必要がある。

それを実現する学び方(教え方)が、アクティブ・ラーニング(「主体的で、対話的な深い学び」)である。他者と対話し、共に学び、知識を深め、探究心を持ち、新しい価値をつくり出していく力がこれからは求められることになる。



2 世界の動きと日本の子どもたち



日本で「ゆとり教育」を見直すきっかけとなったPISA【OECD(経済協力開発機構)が主催する学習到達度を測る国際的な調査】に、「他者と協働して解決する問題」が出題された。このことから、世界全体も「競争」から「協働」の時代に入ってきていることが分かる。「一人の強いリーダーが引っ張っていく社会」から、「全員が参画・協力して、新しい価値をつくり出していく社会」に世界も舵を切りつつある。

しかしながら、日本の子どもたちには幾つか課題がある。一つは、論理的に説明することが苦手ということである。人と意見が違くと、けんかになり、ディベートでは、潰し合ってしまう。したがって、お互いが理解し合いながら、新しいものをつくり出す力が弱いという指摘がある。もう一つは、自己肯定感がとても低いということである。自分をきっちり相手に説明して、理解してもらおうのが苦手なので、どうも自己肯定感が得られないようである。自分は社会の役には立てないと思っている子どもたちも多い。このような課題を背景に、コミュニティ・スクールといったものをつくれないう気運が高まってきた。

3 「豊かな学び」の保障



アメリカの小学校入学生の65パーセントは、大学卒業後、今ない仕事に就いている」とか「現在の仕事は、2030年に50パーセントが自動化され、消える」と言われている。また、知識を伝達するだけの先生もいらなくなると言われている。このような未来に向け、子どもたちに「豊かな学び」の機会を保障すべきである。今は、「親の背中を見て、ついてくれば大丈夫だ」とは言えなくなってきている。様々な社会体験を積みながら、社会の在り方、自分の人生の在り方について、自分たちで考えていかなければならない時代がやってくる。その意味で、子どもたちに「豊かな学び」を保障していく必要がある。「豊かな学び」とは、単に知識を詰め込むだけではなく、様々な社会体験を通して、独自の価値を作り出していく力を身につけていくことである。さらに、その中で大事なものは、人と競争して勝ち残っていく力というより、お互いを尊重しながら、他者と共に新しい価値を作り出す力だと言われている。

4 地域が支える学校



一昨年、中教審から「『次世代の学校・地域』創生プラン」というものが出された。「教員資質向上答申」、「チーム学校答申」、「地域学校協働答申」という三つの答申の内容を具体化したものである。「教員資質向上答申」は、知識を伝達する先生から、子どもたちに寄り添って共に知識を探究し、新しい価値をつくり出す先生に変わって欲しいということである。「チーム学校答申」には、現在、学校が様々な問題を抱え込み過ぎていくという背景がある。多くの教育長が、今の状況でいくと2030年まで学校は持続しなくなると予想している。そこで、先生が教育の専門家として、きっちりと役割を果たせるように、地域でサポートできないか、ということである。例えば、今、子どもたちは貧困問題など、様々な福祉問題を抱えている。そこに、スクールソーシャルワーカーを入れるなど、福祉の専門家にかかわってもらえないか、あるいは、部活の指導なども地域の方々に担ってもらえないか、ということである。そして、それらをまとめるのが、「地域学校協働答申」である。学校を地域で支え、学校でできないことは地域が請け負う、また、地域も子どもたちを受け入れなければならないという自覚と責任を持ち、学校を核とした地域を創り出すことを意図している。

5 先ずは小さなコミュニティづくり



日本は、少子高齢化、人口減少に加え、OECD諸国の中で最悪レベルの貧困状態と言われている。また、平成の大合併で、地域を無理に合併させた結果、地域が壊れてしまい、自治体が疲弊している。子どもたちをちゃんと育てていく仕組みはもともと地域にあったはずなのに、気がついたらいつの間にか地域と学校は分断され、親も子どもたちも孤立してしまっている。そこで、もう一度新しい社会を構築し直さなければいけなくなってきている。「競争」するのではなく、「協働」しながら新しい社会をつくり、子どもを含めた全ての人がフルメンバー（主役）になっていけるような社会をつくる必要があるだろう。今、人々がお互いを認め、助け合う、小さなコミュニティづくりが重要になってきている。全国で調べてみたところ、組織づくりがうまくいっているところは、公民館がしっかり機能していることが分かった。公民館がしっかりしていて、そこを拠点に住民たちがお互い支え合い、地域活動をすることに慣れている地域はちゃんと機能している。さらに、次のようなことも分かってきた。中学校を卒業するまでに地域社会で豊かな経験を積んだ子どもたちは、地元に残って、地元を何とかしたいと思う傾向が強いこと。また、生まれたときに既にパソコンがあって、ネットで繋がれている今の若者は、仕事は作れる（持ち運べる）と思っているので、仕事がないという理由で地元から離れていくこともなくなっている。若者は、ちゃんと受け入れてくれるところに留まる。「よく来てくれたね！君の役割はちゃんとここにあるからね！一緒にやろうよ！」と言ってくれるところに若者は居場所を求めることが分かってきた。彼ら自身がちゃんと尊重されるかどうか、相手と相互承認の関係に入れるかどうか、若者を地域に惹きつける決め手になることが分かってきている。

6 まとめにかえて—小さなコミュニティの実践例—「たまごプロジェクト」



小さなコミュニティを作り出す一つの試みが、「多世代交流型のまちづくり」という形で動いているところがある。これは千葉県柏市のある高齢化地域であるが、ここは今、小学校、中学校、高校、特別支援学校と地域の住民が連携して、さまざまな活動を行っている。私たちが関わった事例は「たまごプロジェクト」と言われている。高齢者がケアされる側になるのではなく、他人の孫(た・まご)も自分の孫にして、高齢者全体

で、自分の孫のように見守る新しいまちづくりを展開している。まず、地域の方々がまちのコーディネーターになれるように、「まちの長老セミナー」という形でコーディネーター養成プログラムを組み、受講してもらい、自分たちで地域を運営する力をつけてもらった。この活動の核となるのが、高齢者が組織する「多世代交流型コミュニティ実行委員会」（通称「多世代さん」）と、彼らが運営するコミュニティ・カフェである。カフェには子どもを含め120名ほどの住民が毎日訪れ、交流し、地域活動を展開することで、地域の間人間関係が劇的に変化し、お互いを慮る関係が醸成されている。



例えば先日、地域の方々が小学校の遠足に同行した。私も知らなかったが、遠足は先生方にとっては苦行らしい。1人で30人も40人も引率していると、事故があってはいけないのでトイレも行けず、前日から水分を控えているという。この日は、子ども70名に対して地域の方々が40名も同行してくれた。そのおかげで、「ちょっとお願いします」の一言で、先生は何の心配も不自由もなく遠足を終えることができ、地域の方々は大いに感謝されたそうである。

高齢者が孫世代と交流することで、次世代を育成し、自らもコミュニティの主役になっていく。このコミュニティが注目される理由は、それだけではない。柏市全体では子どもが減っていて、学級減が進んでいるにもかかわらず、子どもたち（子育て）に優しいと評判になったこの地域だけは、その評判を聞きつけた子育て世代が多く転入し、学級増になるという「新たな価値」をも生み出している。



講演の感想の一部を紹介します！

現代から未来における日本の人口の減少等、社会の変遷と課題について具体的な数値を示しながらの講演だったので分かり易かった。地域コミュニティの在り方について改めて考える機会になった。【学校関係者】／最近よく耳にする少子高齢化、アクティブ・ラーニング等について色々と考えさせられた。30年後の社会ということで、普段考えたことがなかったが、未来の社会を作る子どもたちのために、子どもたちとの関わり方をもう一度見つめ直し、自己肯定感の高い子どもたちを育てていきたいと感じた。【保育園関係者】／地域が人を育てる社会構造になる必要があるのではないか。学力とは、結果的に地域を支えるものでなければならぬことを学んだ。地域と学校の関係、関わり方を考え直す時がきているだけでなく、もっと地域力を学校現場に活用する方策について真剣に考える必要があることを学んだ。【学校関係者】／コミュニティ・スクールについての多方面からの分析が深く、また、具体例もあり、難しい課題に光明が差した思いがした。肩ひじはらずに進めていくことの大切さを思った。【学校関係者】／地域の公民館活動を活発にさせることを行政が推進し、地域のその活動を子どもの育成につなげる、それが、地域と学校の連携につながり、コミュニティ・スクールの原点がそこにあることを強く感じた。

【学校関係者】／地域力低下・再生は、小さなコミュニティから始まる。コミュニティの基は、小さな顔の見える社会をたくさんつくることということが最も印象に残った。話しも大変おもしろかった。平成の合併が地域を壊したことで、子どもを巻き込んだ地域再生活動はやがてふるさとへもどってくる子どもを育てる取り組みとなる、など、勉強になった。【青少年育成コーディネーター】／子どもの貧困等への対策として、地域コミュニティの充実を実現していただきたい。まだまだ元気な高齢者に地域のために役立っていただける事は、高齢者・地域の子ども両方にメリットがあって良いと思った。【保護者】／地域を巻き込むコミュニティ・スクールの大切さがとてもよくわかり、今、抱えている問題を少しでも改善する糸口になった。

【保育園関係者】

◆ 「やまなし少年海洋道中」参加内定抽選会 ◆

6月3日（日）「やまなし少年海洋道中」の参加内定者抽選会が甲府市のことぶき勤学院にて行われました。「やまなし少年海洋道中」とは、県内の中学生を対象に、8泊9日の日程で、洋上生活体験や八丈島における自然体験活動を行うものです。活動全体を通して、友情・連帯・責任・奉仕の精神を涵養するとともに、地域リーダーとしての資質向上を図ることを目的とし、心豊かでたくましい青少年の育成を目指しています。今年度のテーマは、「八丈島・でっかい体験2018」で山梨県内中学生50名(男女各25名)を募集しました。



今年度も応募者多数のため抽選で参加者を決定することとなりました。男女比を考慮して、女子は全員が内定となりました。男子はどの地区も同じ割合での参加とするために抽選となりました。保護者が見守る中、緊張の抽選が行われた結果、生徒は一喜一憂でした。

今後、事前研修会等を実施し、いよいよ7月31日より8泊9日の八丈島の研修に臨みます。生徒は貴重な体験の中、一回りも二回りも大きく成長して、戻ってくることでしょ



◆「子育て支援リーダー実力アップ講座」開講◆

6月22日に山梨県立大学において「子育て支援リーダー実力アップ講座（第1回）」の開講式が行われました。

地域社会の急速な変化や価値観の多様化などに伴い、子どもや子育て、家庭をとりまく環境が大きく変化し、核家族化や共働き世帯の増加、雇用環境の複雑化に伴う親の子育てへの不安感・負担感の増大が課題となっている中、地域で子育てや家庭教育の支援活動を積極的に推進できる人材を確保するための講座です。



県立大学の高野牧子教授による本講座のオリエンテーションの後、県立大学名誉教授の池田政子先生の講座が開かれました。池田先生から子育て支援の歩み(背景)や子育て支援の目的をわかりやすくお話していただきました。その後、グループに分かれ、それぞれの職種や立場から、最近の子育ての状況や感じたことを共有する中で、これからのグループ研究のテーマについて話し合いました。



講座は、全10回を予定し、11月のグループ自主研究発表会まで、講義と研究を進めていきます。

◆「地域教育の力」—北都留地域教育推進連絡協議会の講演会より◆

中北地域教育推進連絡協議会から2週間後の7月5日、大月市に於いて、北都留地域教育推進連絡協議会が開催されました。総会に先立って、YBSワイドニュース（毎週月～金曜日18:15～19:00生放送）担当のキャスター：水越千尋氏を講師に迎え、「ニュースから見える地域の魅力～地域教育と私～」と題した講演が行われました。アナウンサーになるという夢に向け、強く背中を押し続けてくれた地元（上野原市・四方津）の方々への感謝の気持ちが繰り返し語られました。会場となった大月市立図書館は、水越氏が都留高生時代、大学受験に向け日々勉強に励んだ場所でもあり、自分を育ててくれた故郷で、その素晴らしさを語ることにこの上ない喜び感じている様子でした。今後は、仕事を通じて故郷に恩返しをしたいと熱く語る講師のことばに、地域教育が持つ力を改めて垣間見た思いでした。



◆ 社会教育関係団体の総会で表彰式 — 中北地区管内では8名の方々 — ◆

県が活動を支援している「山梨県社会教育振興会」に加盟している2つの団体（山梨県社会教育委員連絡協議会・山梨県公民館連絡協議会）の総会が6月に行われました。それぞれの会の中で、長年の功績により表彰を受けた中北地区管内の方々を御紹介します。表彰者は中北地区管内の方々が全体のほぼ半数を占めました。おめでとうございます。

- ・山梨県社会教育委員連絡協議会表彰 [全表彰者10名中5名が中北地区管内]
長田温雄 様（中央市）・渡辺まさ江 様（中央市）・内藤久敬 様（北杜市）・
板山國夫 様（北杜市）・栗澤雅子 様（北杜市）
- ・山梨県公民館連絡協議会表彰 [全表彰者8名中3名が中北地区管内]
野口紘明 様（韮崎市）・柘形昭平 様（韮崎市）・松永辰美 様（韮崎市）



平成30年度 『中北.com』 No.2
編集・発行 中北教育事務所 地域教育支援
スタッフ 深澤 隆二・伊藤 哲也
〒407-0024 韮崎市本町4-2-4

電話 0551-23-3046
Fax 0551-23-3013
カラー版は中北教育事務所のHPでご覧になれます
<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/>